

K*****U***

上***

北海道

ふたたび旅

父と娘の七日間



羊 蹄 山



早春の羊蹄山



羊蹄山記念



羊蹄山遠望



直線道路

ニ セ コ



ニセコの雪道



ニセコ全景



小樽



日本銀行小樽支店



小樽運河にて



旧日本郵船小樽支店

宏楽園



北大



クラーク像前にて

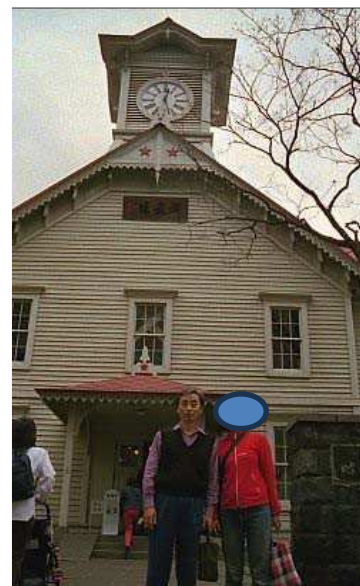


農学部



新渡戸像

札幌



サロベツ原生花園



変貌する湿原、遠くの緑は熊笹

利尻



ノシャップ岬、稚内



鉄路最北端にて



間宮林蔵、渡樺地点の像



宗谷岬



最北の灯台



宗谷岬の歌



宗谷岬全景



カモメ飛翔

美 瑛



セブンスターの木



富 良 野



小屋の中



麓郷の森

帰途山中



鹿

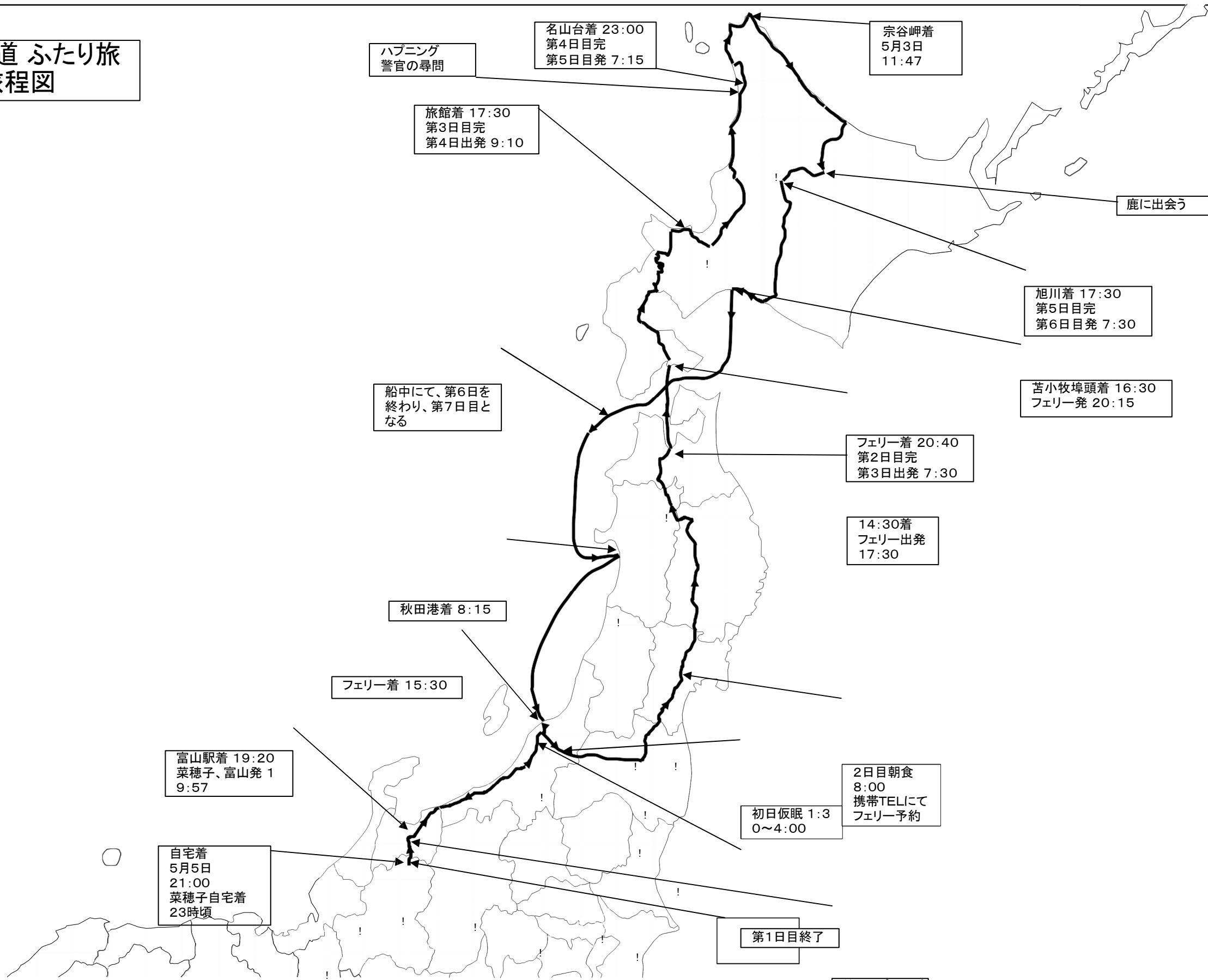


路上の霧

船内



北海道 ふたり旅 旅程図



出発地点
4月29日
21:23

第1ハプニング
飲酒検問

目次

写真集

旅程図

プロフィール	二
旅の発想	三
旅の準備	三
出発・第一日目	四
第二日目…四月三〇日	五
第三日目…五月一日	九
第四日目…五月二日	一三
第五日目…五月三日	一七
第六日目…五月四日	二三
第七日目…五月五日	二七
エピソード	二九
あとがき	三〇

【ブローグ】

男の習性が、自分の性格が、自分の何かの行動に対して、他人は言葉に出してあまり反応しない。しかし、今回は少し様子が異なった。すなわち

「ほんとに、北海道まで行ったの」と言うのと

「今時、旅行について行ってくねる娘さんなんて、そうじゃないよ」と言うのである。

特に後者については、多数の人が異口同音の発言をした。確かにそうかもしれない。しかし、「娘と二人の北海道旅行」は実現した。「二人旅」は始めての、そして、最後のものになるに違いない。

【旅の発想】

今年（平成十二年）の連休はかなり長い。どう過ごそうか、パソコンのプログラムでも組むかと思っていたら、母さんが「こんな時間が取れるのも今回が最後かも、何処か旅行にでも行ったら」と言う。そうだ、車の中で寝るもよし、ナヒも有るし、東北・北海道の一人旅も悪くないなと急に思い立った。小学六年のとき読んだ「次郎物語」の「無計画の計画」を実行しよう、そう思ったのである。この時は一人旅のつもりであった。ところが、その後、〇〇子より電話があり、彼女も連休が長いと言う。まさかと思いつながら「北海道」の話をする。「本気で考えてみる」と答える。こんな経緯で「二人旅」が始まることとなった。ただし、「無計画の計画」、「車の中の野宿」そして「自炊」の条件は変更無しで実行することとした。

【旅の準備】

何せ、「無計画の計画」であるから、基本的には準備するものは無い。ただし、「自炊」のイメージはした。それは、どこか原野の中で〇子と食事をしている風景である。車の後部に折りたたみ椅子を二つ用意し、何かテーブルになる食事台を椅子の中に配置し、食事台の上にはワインが有り、日の当たらないようパラソルも有る、と言うものである。このための準備のみは、前日の夜（四月二十八日）にした。一番苦労したのは、パラソルをどう立てるかである。思案の挙句、大型三脚に縛ることにした。

〇〇子は二九日の午後富山駅に着く。会う前に、自炊に必要な機器類は買い揃えた。食事の材料は、〇〇子を迎えた後、帰途に二人で相談しながら買い求めた。

衣類も北海道の寒さを予想して用意した。車での「野宿」の用意も抜けの無いよう考えた。二十リットルの水も積み込んだ。風呂だけ考えなければ、これで四〜五日の生活は出来るはずである。

【出発・第一日目】

四月二十九日午後九時三三分、ODDメーターをゼロにして出発した。母さんが見送る、〇〇子も後ろを向いて手を振る。いよいよ二人旅の始まりである。

* 「無計画の計画」らしく、自分は、出発は四月三十日朝かと考えていた。しかし〇〇子は当然二十九日の出発と想っていたらしい。それならば、急遽右記の時間とした。

旅の始まりに興奮して〇〇子も喋るが、この数日二〜三時間しか寝てないらしく、「お父さん眠くない？」と私を気遣う気持ちも見せながら、程なく眠り始めた。

富山ー〇にて〈第一ハプニング〉がおきる。

* もともと「無計画の計画」なのだから、全てがハプニングであるが、「無計画の計画」と「ハプニング」と言えるような出来事を、今後の記述においてハプニングと記述する事にすな。

この夜の夕食は、手巻き寿司であった。この時はまだ九時の出発を決めていなかった。当然のことながら自分は酒を飲む。缶ビールと酒を少し飲んだ。さて〇〇に話を戻そう。高速カード受け取りの先に、警官がハンドライトを持っているのが見える。「？」と思いながら進むと、停車を命じられ「飲酒運転の検問です」と言う。「！」と思うが最早どうする事もできない。「息を吹いてください」との要求にたいして、何食わぬ顔で息を吹いた。「気を付けてどうぞ」と警官。車を発進、窓を閉めて大きく安堵の息を吹いた。この話を後日〇〇子にしたら「そんなことがあったの！」とビックリしていた。

あとは、車を走らせるだけ。北陸道の新潟手前で二四時を過ぎた。走行距離約二百キロ。

自分「少し何か食べながら、考えてみよう」

こんな会話を交わしながら、初めての「自炊」をすることにした。「コンロを出し、ご飯を温め、インスタント味噌汁とパン詰めの簡単な朝食。食べながら、フェリー会社に携帯TELにて電話。この間若干の経緯は有るが、結論として、帰りの苫小牧→新潟のフェリー予約を得る。これで安心したのか、朝食を食べたせいか、気分はかなりの楽になる。東北はとびきり、一挙に北海道まで行くことになった。

* OOO子が是非北海道と言わない「一人旅」であれば、今回の「北海道」は実現しなかったであろう。

* 出発前、青函トンネルが車で通れるか一議論した。通れるという人もいるし、通れないという人もいる。中には通った経験がある「二階建て構造で、上段が車道」とかなり具体的な話をする人もいた。フェリーの予約と同時に、この疑問解消のTEL確認をする。結論は「通れない」であった。

ナビのセットを青森港にして、再びスタート。目的地までの距離も一挙に短くなり、車も快調に走る。この間

「日本三景って何だっけ?」

「宮島、天橋立、松島だろ」

「未明の、天橋立を見たな・・・」とか、OOO子が、東北旅行した時の

「遠野は良かった」と思い出を話すと、自分は急に、「柳田国男」を思い出したりなどする。

岩手県は長い。青森はまだか、などと思って走っていると、急に大きな山が目に入る。岩手山SAに入り、岩手山をバックにまたも「2ショット」。

青空をバックにした岩手山は、雄大であった。岩手山PAの出発が二時三十分。

程なく、青森県の表示が出る。道は山の中。風景も何となくうら寂しい。本州の最北に来た感じがし始める。

東北道最後のPA「高館」にて一休み、顔を洗つなど、先の見えたことも有って少しのんびりする。青森港に着いたのは、一四時三十分であった。

予約したフェリーは安全を見て最終便にしていたが、思いがけず早く着いたため一七時三十分に変更することにした。これからの手続きを

〇〇子が一人でどんどんする。なんとなく「一人前に成ったな！」などと、知らぬ間の子供の成長振りに妙な感じを覚えたりなどする。

出航までには時間があるので、埠頭の芝生でインスタントラーメンを食べる。昼食を食べなかつたせいもあり、まことに美味。持参のウイスキーを出しながら「ここは道路交通法が適用されないから、飲んでも良いのだ」などと理屈をつけ、水割りを一杯。

上船は別れて乗ることになる。〇〇子は 恣際の良い席をとって置くからネなどど張りの切る。一六時上船の案内。一六時二〇分上船開始。青岐フェリーに比べると、大きくて豪華。一七時出航。神岡よりの走行距離九四五キロメートル。

* 青森↓函館のフェリー代約二万八千円。苫小牧↓新潟のそれが約二万二千元。青函フェリーの高さにはビックリ、

函館に二〇時四〇分着。いよいよ北海道の旅の始まり、まずは食事と言うことになる。最初の食事は「ウニ丼」または「イクラ丼」と決めていた。ガイドブックに載っている店を何とか探し当て入ると「カンバンです」と断られる。「変なカップル」と思われたかもしれない苦笑しながらも、少し頭にくる。後は、行き当たりで探すよの手が無い。車で探し回るうち「かにっ子」という店に入る、ここは気持ちよく受け入れてくれる。予定どおりの「ウニ丼」を頼むと、材料切れで「ウニ・イクラ丼」一人分なら出来ると言う。〇〇子にそれを食べさせ、自分はピラメの焼き物他。結構美味しかった。

食事の後の行動は、青函フェリーのなかで決めていた。「東洋一の夜景」を見ることがある。車にて三〇分余りで函館山に着く。さすがに夜の北海道は寒い。防寒具に身を固め、展望台の頂上に登る。眼前に広がる夜景！。これまで、雑誌、テレビなどで見た記憶のある風景と同じものが眼前にある。空気も澄み、地図の形をした遠くの風景までクッキリ見える。三脚をセットし、連続六枚の写真を収める。

寒さもあり、程ほどにして下山。野宿場所は「かにっ子」の正面にある駐車場と決めていた。これは〇〇子が見つけたものだが、横に公園があり「トイシ・公園」の野宿場所である。

野宿場所・車中で「無計画の計画」の必然として、明日以降の計画を立てることとした。

* 自分の意識の中には、北海道とき岐の島が同一サイズの感覚が在ったらしい。二〜三日もあれば、かなりの部分は廻れるだろうと思っていた。

〇〇子が「お父さんはどこへ行きたい?」と聞く。そうだな「北大と、それに宗谷岬か知床岬か、あとは『北の国から』の富良野程度は見たいね」そんな会話をしながら、地図を広げ、縮尺と見比べながら計算してみると、とても「岬」まで行く余裕は生み出せそうにない。とあえず、道南中心であきらめる事にして、とあえず明日は有珠山経由「セ」¹、小樽程度とする²に³した。

寝床の準備をし、〇〇子は「ローピー」自分はウィスキーを飲み、北海道で始めての夜を迎えた。寝たのは二四時頃であつたらう。

【第三回 五月一日】

五時三〇分〇〇子が私を起す。〇〇子はすでにお湯を沸かしている。朝食はコーヒーとカステラ。

* この頃母さんはカステラ作りに凝っており、我が家は試作品のカステラの山が出来ていた。出発時、我々は要らないと言いつつ、母さんはこのカステラを無理やりクーラーボックスに押し入れた。結果としては、この「試作品」に随分と助けられる事になる。

話を戻す。洗面をし、七時半頃第一目標地点の有珠山を目指し出発した。五号線をしばらく走ると、右手に内浦湾(噴火湾とも言う)が見えてくる。湾沿いにしばらく走る。

* 片側一車線ながら、さすがに北海道の道路は遙か遠くまで一直線という個所が多い。速度は九十キロ/時前後でほとんどの車が走る。自分も程なくその感覚に慣れ、遅い車(それでも七十+)がいると、つい抜いてしまつ様になった。北海道で事故の多いのも判るようになるがした。この感覚は、北海道を離れるまで抜けなかった。

長万部を過ぎる頃より、「有珠山」関係の道路情報が随所に出たり、パトカーに何台も出会ったり、「事件(失礼)現場」に近い感じが高まってくる。二七号線は通行止めであり、虻田町で左折する事としたが、その左折ポイント手前で車を止め、湾越しに有珠山方向の写真を望遠で撮った。曇っていたのと、距離も遠いこともあり残念ながら(?)噴煙は見えなかった。

虻田町を後にしてしばらく山の中を走る。正面に雪を被った端正な山が見え始め、走る内その山は右に左に段々大きくなる。〇〇子に地図で名前を調べると、羊蹄山らしい。名前は以前から聞いたことはあるが、こんなに美しい山とは知らなかった。途中で車を止め、何枚か写真を撮った。

真狩村という所で、小奇麗な道の駅に車を止め小休憩。インスタントコーヒーを飲んだりなどしている内、〇〇子が『細川たかし』の銅像「の看板を見つけた」何で、細川たかしの銅像!」と内心苦笑するが、〇〇子は見に行つてくると言う。程なくして帰つての話では「こは、細川たかしの出身地、しかも、その銅像は、羊蹄山をバックに堂々としたもの」という。なんだか自分も興味湧き、〇〇子と連れ立ち観に行く。なるほど堂々と羊蹄山をバックにした銅像があった。〇〇子は、はしゃいで銅像の横に立ち写真を撮る。

同じよりのニセコ町は近い。ニセコの駅に行き観光パンフレットを買う。

* 目的地の駅にまず行き、パンフレットを入手。それを基に、二人で相談のうえ何を見て廻るか決める。とりわけて決めただけではなく、後から振り返る必要が今回の「無計画の計画」のルールとなっていた。

ニセコの駅舎は小さいながらも瀟洒。駅舎をバックに三脚で「ニシヨット」。

学生時代夢中で読んだ、中谷宇吉郎の書き物を想いだす。彼が「雪の結晶」を写真に収めたのはニセコではなかったかな?。「雪は天からの贈りもの」という名言を残したな!。「中谷記念館」でもあれば見に行くが、そんなものは無く、結論として「ニセコメートル台地展望台」へ行くことにした。そこは結構遠い。「ドライブ旅行の特権だね」などと話しながら車を進める。途中、広大な原野を農地にしたいかにも北海道らしい風景に随所で出会う。思わず車を止め写真ただし、このような風景は今後の旅程で、いやといつぽい出会うことになる。再び車を進めると、風景の中に雪が混じり始める。スキー場の設備も多い。さらに車を進めると、山は雪で覆われ、その中で木立が黒く凜立する。〇〇子思わず「凄い!」と叫ぶ。写真の思いもしたが帰り路撮ることにする。さらに登ると、右に休憩所らしい建物があり、その先は行き止まり、展望台は歩かねばならぬらしい。「展望台」はあきらめ、休憩所で一服、〇〇子は駄菓子、自分は缶ビールを求めて下りた。

下山途中例の写真スポットにて停車。〇〇子は撮影を始める、私も同様。ハブニングく、LXのフィルム枚数を見ると三九と成っている。三六枚取りのフィルムを忘れていたかな?と思い、装填フィルムを確認すると二四枚取りとなっている。まさかとは思いつながら、シャッターを押しフィルムの巻き取りを確認すると、全く巻き取らない。フィルム取り出し逆転レバーを回すと、即座に取り出し可の状態になる。「フィルムを巻き取っていない!」。〇〇子にその話をする、「仕方ないね」、「函館の夜景も入っていたのに」と、慰めども、嘲りとも取れる発言をする。自分としては、「夜景」もやることながら、普段並んでスナップ写真に入るのを拒む〇〇子との「ニシヨット」が全て皆無になったのが、如何にも取り返しのつかない感じがして、なんとも寂しい思いをした。

* 後でフィルムを現像してみると、これ以前のものではHEXERで撮った、羊蹄山の写真が数枚あった。

「覆水盆に返らず」と諦め、ビール・チーズ地で昼食。そのまま道端に座り込み、これからの予定を相談する。

自分「明日の予定は札幌のみ、急ぐ必要もなし、今夜は旅館にでも泊まるうか」

〇〇子「車でもいいよ」

自分「ホテルより、旅館がいいね」

〇〇子「鄙びた、旅館ならさらにいいね」

と、そんな会話で、その夜は小樽に宿を取ることにする。持てる資料で宿を探すが、「これ」というのも見つからず、小樽近郊朝里川温泉を中心に小樽駅にて決めることにして、「セコ」を後にした。「セコ」山から麓の余市まで小一時間、真冬から初春をいっきに駆け下りた。小樽駅には一四時前に着く。小樽駅では例により〇〇子が一切の交渉をする。朝里川温泉の「宏楽園」という宿の予約を取り付け、小樽市内の観光マップなど手に入れて来る。ただし、お金を払うのはこちらの役目、これは致し方ない。

宿に入るまでに少し時間がある。さて何を観るか。パンフレットを見て、これだけと思ったのが、日本銀行小樽支店である。この建物は「辰野金吾」の設計によるもので、明治四三年に建てられた。「辰野」は母校九工大の講堂設計者であり、さらには東京駅の設計者でもある。なぜ観たいのか、上記の謂れを〇〇子に話すと興味深そうに聞いてくれた。後、やはり明治の建造物で、旧日本生命小樽支店を見た。建物も立派であるが、興味を誘ったのは、「ここで、日露戦争の講和条約・樺太国境画定会議が開かれた」という理由による。「坂の上の雲」にこの話は載っているのではあるうか？。

〇〇子の目指すは、小樽運河と北一硝子本館らしい。まずは、運河周辺を歩く事とした。運河をはさんで古い倉庫を改装したお店が並び、「倉庫」の重厚さは、往時の交易の深さを偲ばせる。〇〇子は「二店」に入るが、自分に遠慮してか長居はしない。地ビールを売り物にする店もかなりある。自分はこれに惹かれるが、小さなコップ一杯で五〇〇円は高すぎこれにも入らず。運河の両側を歩いた後、北一硝子本店を目指すことにした。本店は少し離れており、地図を頼りこのんびり目指す。途中寿司屋の多いのにビックリし「良くやっついていける」と思ったし、〇〇子は居並ぶ魚屋にて写真を撮ったらしい。

* 〇〇子の被写体は、鯛の干物を逆光で撮ったり、氷の上の船の居並ぶ様を撮ったり等、自分とはかなりずいぶん違う。〇〇子の感性を思わす感じだったらしい。

「本館」で自分の興味を惹くものはあまり無かった。ただ、一昨年母さんが北海道旅行したとき、この店に寄ったのだと思うと「亡き人要想う」のはこんな感じかと、妙な思いがした。〇〇子は何があったらいいが、お金との相談で、何も買わなかった。ただ、絵葉書を十枚あまり買い求めた。「旅に出たら、親しい人に葉書を出すこと」になっているの「と言いながら」。

* 話は前後するが、〇〇子は夜旅館で最後の時間にこの葉書に何枚か便りを書いていた。友達にでも書いているのだろうと、自分は先に寝たが、帰宅後この夜〇〇子の書いた自分と母さん宛の葉書が届いた。

* 自分宛

「お帰りなさい。きちんと帰れたら5日の夜中ってトコかしら。本当お疲れさまです。1人の運転、2人の旅、2人分の旅費と何かとお世話になりましたね。(今のトコ、きっとなる予定) 本当ありがとう。きっと、今の状態での、こういう旅の仕方はないだろうし、次は次の形で楽しみです。旅はステキ。二人とも変化しつつ、またステキな時間すごせたら 人生って楽しすぎますよね。そんな事思っ北の夜でした。 2000・5・1 娘 なおこ」

* 母さん宛

「ドタバタ旅行も3日目です。今日は宿をとってくれたから、のんびり温泉。アゲゼンスエゼン！ 父娘2人旅なんてきつともう無いただろね。十分甘えておくわ(笑)。北海道は広すぎて、何度も ゆっくり行くのがよいね。また行きたいです。明日は札幌。ラーメン・ジギスカン！ ドタバタはまだまだ続く！ 次は松子京都入りやなっ！ 2000・5・1 娘さん なおこ」

旅館には午後五時半ごろ着く。庭も広く、鄙びたところか思いのほか大きな旅館。すぐに風呂、そして夕食。予想外の豪華料理、別部屋でなく自部屋での食事もくくろる感じ、思わず写真撮ったり等。仲居さんに、旅の謂れを聞かれ「二人旅」の説明をする、「祝辞」を述べたりなどしてくれる。酒はビールを一本頼み、「奮て旅行よろしく」後は持参のワインとウィスキーを持ち込み飲む。二時間余りのんびり食事、〇〇子も結構飲む。食事の後、明日以降のため二十歳ホリの水の入替などバタバタ、〇〇子が「お父さんも結構やるね」などと冷かす。なんだか豊かな気分、三日目を終える。寝る前、明日は札幌、明後日は富良野近辺と思うと、ぐっすり一日余りそう。おかしいなと思

いながらも、その夜は寝る。本日の走行距離、三二〇キロ^{キロメートル}。

【第四日目：五月二日】

朝七時過ぎ起床。この時点では、本日は札幌のみと決めていたでのんびり朝食。夕方ぶりにしっかりした朝食をとった感じがした。宿は九時十分出発。車中〇〇子に昨夜の疑念を話してみた。「今日 札幌、明日 富良野付近では余裕あり過ぎないか？。どうもお父さん計算違いしていたような気がする。宗谷岬まで行けるのではないかな？」。〇〇子、「行けるのなら行ってみたいが、お父さん大丈夫？」と、気遣ってくれる。とにかく、札幌のスケジュールをこなし、その後考えることにした。

札幌の第一目標は北大。カーナビを拡大し「クラーク像」を目標地に設定して行動に入る。

* 車中、北大を見たい理由を〇〇子に話した。一期校の受験先を、広大か北大か迷った時期があり、結局 資金力と学力とで広大にしたこと。ついでに、九工大が自分の母校となった理由など。そんな訳で、北大には何となく惹かれるものがあると……。

これまで、どの道路も「高速なみ」の速度で走れたが、札幌市内に近づくとも渋滞し始める。やっとのことで一時間前「クラーク像」付近に到着。若干の経緯は有るが、駐車場に車を停めるも、入り口が判らない。北大生らしい人を呼び止めクラーク像への行きかたを聞くと、「どのクラーク像ですか？」と言う。妙なことを言っている。「胸像ですか？」と言う。判らないまま「そっだ」と答えると、親切に行き方を教えてくれた。

北大裏門で「観光パンフレット」を貰う。さすがに広いキャンパス。パンフレット片手に、「クラーク像」に向かう。道すがら、〇〇子の求めに応じて、クラーク博士に関する話などする。曰く、「札幌農学校とクラーク博士との関係……」。「有名な Boys be ambitious」の後には詳細は忘れたが、後に続く言葉がある……。「など」。

「クラーク像」は、予想外に小さな像であった。我々の他に観光客はいない。北大生と思しき人に頼み、像を横にして「2ショット」。その後、理学部、農学部と見て廻った。いずれも、古さと威厳を備えた堂々たる建物。我々外部者が入れるのは玄関までであるが、天井・扉などには彫刻が施してあり、〇〇子はそれらを写真に撮っていた。理学部から農学部への道すがら「火山研究所」の表示が目に入った。有珠山調査の中心人物「岡田教授らもここにいるのだネ」と二人で話した。

農学部の裏側にあたる場所に、例のポプラ並木があった。これまた堂々たる並木である。まだ季節が早く葉は出ていないが、それでも薄

っすらと赤みがかり、春を迎える準備に入っているのが伺える。枝が落ちる危険性もあるということ、並木の中には入れないようにされており、その入り口で「2ショット」。ポプラ並木のすぐ側に、右手を上に掲げたクラーク像と「新渡戸稲造」の胸像が立っていた。新渡戸の像の台座には「I want to be a bridge across the Pacific」と刻まれていた。「太平洋の掛け橋」という言葉で、「遠野物語の『柳田国男』と名前が同じの『柳田邦夫』の書いた、小説『マコ』」の話を〇〇子にする。話は太平洋戦争の始まり真珠湾攻撃にまでおよぶ。

学生会館が見える。〇〇子は「お手洗い」といつてツカツカと入り始めた。咎められるのではないかと心配するが、京都でそういう場面には慣れているのであろう。〇〇子の京都での生活が偲ばれた。自分も中に入ってみる。「二階に上がると、そこにはいくつかの銅像があり、ここにもクラークの像があった。北大の中には、いくつものクラーク像が在るのであろう。「クラーク像」の道案内を聞いた時、「どのクラーク像ですか?」と問いかけた、案内人の真意がようやく理解できた。

学生会館内で見える学生の顔は、いずれも輝き、聡明そうに見えた。〇〇子に「テレビで見える原宿あたりを屯する若者の顔つきと違うネ」と話しかけると「私もそう思う。私は初対面の人でも数分話すると、その人となりがわかる」と〇〇子は答える。「それでは、将来お婿さんになる人は大丈夫だね」と言つと「まだそんな人はいないが、お父さんに拒まれるような人は選ばないよ」とも言う。図らずも、キャンパスを見る目的の他に、色々な話をすることが出来た。

北大を出たのは、一一時頃であった。駅前の「そごう」駐車場に車を止め、計画どおり昼食に「ラーメンを食べに行く。少し歩くよう。その途中で「時計台」と「大通り公園」を見た。さすがにこれらは、観光スポットらしく人も多い。

ラーメンは「ラーメン横丁」で食べた。小さな路地の両側に、二十軒程度のラーメン屋が並び、「通り歩き」混んでいる店」に入る。缶ビールと味噌ラーメン、〇〇子はチャーシューメンを頼む。もったいぶってか、悠然とラーメンを作るが、出たものは不味くもないが格別美味しいという気もしなかった。

* 食事中テレビで「本日の『GROSS』の位置精度が良くなる」と報じた。理由は、これまで軍事上の事情でアメリカが妨害電波を発生していたが、それを本日の止めると言う。これにより、精度が100%から10%に10倍あがるという。アメリカの「力」を感じた。

少し疲れたので「乗る物で帰るのか」と言つた「ダメだね」と言いながらも、地下鉄の入り口を探してくねる。

駅地下街と「そごう」で買い物をするにしていた。自分は、買うものを決めていたのでサッサと買い求め、後は遠くから〇〇子の買
い求める様子を見ながら待つ。友達に喜ばれるものという気持ちも有るのであるが、五〇〇円・一〇〇〇円程のものを、何度も取っ
みたり、また戻してみたりと、ためらう様子が伺える。お金に苦労しているのかなど、〇〇子の気持ちを察して何だか可愛想になる。

* ここで自分が買い求めたのは、会社宛みやげ、母さん宛にはカステラ。自分用には北海道産ワインなど。このワインは、北海道を離
れる最後の「自炊」時、〇〇子と旅の成功を祝し「乾杯」するためのもの。

買い物した後、「次は何処にする」ということで地図を広げ、「羊が丘」に行くことにした。これまた、車でなければ行けないところにある。
行く途中「事故」を起こそうになるが、「自分の名譽のため」詳述は避ける。羊が丘では、広大な札幌の街が遠望できる他羊が十数頭いる
だけで、思ったほどの感激は無い。シンギスカンの店があり、食べようかなと思うが、急に「今から宗谷岬に向け走れば、『宗谷岬』を觀て
富良野も見れる」と考え始めた。〇〇子にその旨相談すると「お父さんさえ良ければ、自分は嬉しい」と言っ

結論は出た。シンギスカンは止め、宗谷岬に向け走り始めた。一六時一五分である。札幌市外を抜けるのに少し時間はかかるが、後は、
例によって快調。札幌より留萌までは陸の中、そこよりは海岸道を走ることになる。暗くなり〇〇子は程なく眠り始める。どこかへ宗谷岬
が明日中に見えるところまでは行かねばと、無我夢中で走った。

しばしば〇〇子も目を覚まし「いま何所？」と聞く。大分来たはずなので「もうそろそろ停まっても良いかな」と思いつつ、しば
らく走っているところ、ある町で〇〇子が「トイレ」在り、無料駐車場」の標識を見つけた。天塩町という町の町営駐車場である。ここより宗谷
岬までは一〇〇キロ弱、射程内と思いついで泊まることにした。時計を見たら二一時を示していた。トイレを見に行く鍵が繋がっており開
かない。〇〇子はトイレが使えないということと気が進まないらしいが、自分は疲れもあり「ここ」と決め、夕食の支度にかかる。「一口
を出し湯を沸かし、ウイスキーを飲みながら話など有るもので食事を始めた。〇〇子はあまの食べたくないと言っ。味噌汁なら飲むと言
うので飲ませたりなどしているところへハプニングが起きた。二二時頃パトカーが来る。自分は普通の巡視かと思っていたら、警官は車の
降り色々と質問を始めた。「何か有ったのですか?」と問うと、警官は申し訳なさそうに「近くの住民から、一〇番通報が在った」と言
う。〇〇子と同じ年くらいか、若い警官はいやな感じは与えない。私が飲んでいるのを見ているのを「〇〇子に免許証を持ってこるか」と聞
いたりするが、我々が怪しいものかどうかが判らないうつわ「よもや言えず」少しおどろきの「出来ねば明朝早くへ……」

なぞと言ひ。とにかへ、身元の確認をさせてほしいと言ひので、免許証を見せると、名前など手帳に控え帰って行った。〇〇子が場所を変えようとしたので、飲酒運転で捕まらぬようにこの時はかりは制限時速で町を抜けた。

すじこ走ると「各山台展覧台」という道の駅に行き当たると、場所は幌延町。今夜の野宿場所は「じい」と決めた。そこには「二台車も泊つており、〇〇子は先の場所での安心とすじこ。じいも来るよ、そすがじいも。寝具を整えたらよいことになった。一回時。

本日の走行距離二七五キロ。

【第五日目・五月三日】

六時起床。

* 何気なく、車内のテレビのスイッチを入れる。警官が「バスジャック」に侵入する現場の生放送が飛び込んできた。この時まで、この事件のことは、何も知らなかった。

コーヒーとカステラで朝食。「味噌汁・ご飯」の食事を作る気は起きない。洗面などして、「名山台」を出発したのは七時一五分であった。今日の目標は、とにかく「宗谷岬」を観て旭川まで帰ることである。

ノシップ岬を目指して走り始めるが、途中「サロベツ原生花園」の案内標識が出る。無視して走っていたが、何度も出るので、〇〇子にガイドブックを読ませると、利尻島も間近に見え結構良い雰囲気らしい。「行ってみるか」と車をＵターンして脇道に入った。走る内、利尻島（利尻山）が見え始め、それがグングン大きくなる。紺碧の海の向こうに、雪を頂く利尻山は誠に流麗である。すでに道の両側は原野が広がる。何度か車を止め、写真を撮った。最早ここが「サロベツ原生花園」かと思い、〇〇子にその旨話すが、カーナビの目的地はもう少し先を示していた。〇〇子が「目的地」まで行って見ようと言うので、少し車を進めると建物があり、どうもそこが目的地らしい。駐車場に車を止め、二人ともカメラを持ち外に出た。

資料によると、サロベツ原野は東西五〜八キロ、南北二七キロにおよぶ広大な原野で、その中にはいくつかの観光スポットがあり、我々が車を停めたのが「サロベツ原生花園」という事になるらしい。そこには一周約一キロの木道があり、それを歩くことにした。時期が早いので花は咲いてないが、湿原の味わいは十分に楽しめる。目を遠くにして利尻を見たり近くの原野を観たり、写真を撮りながら、のんびり歩く。急に雲雀の声がする。見上げると雲雀が舞い上がっていた。カメラを構えたが、さすがにこれは捕らえられなかった。この原野は寒さのため、枯草が分解されず、年に一センチ程度泥炭となり堆積するのだそうだ。それなら、自分が生まれてから五センチ程度は堆積したことになる。地球規模の時間スケールで計れば、物凄いスピードで変化しているのだ。現に熊笹が生い茂り、生態系に変化が現れているという。一回りして帰ってみると、休憩所らしき店が開いており、そこで一休み。出発のため外に出ると、利尻山が笠雲を被っている。〇〇子が見つけ、写真を撮り始める。あまり風景を撮らない〇〇子が、利尻山は何枚か撮った。余程気に入ったらしい。車に戻り「来てよかったネ」と

言いつて、〇〇子も「ほんとに良かった」と答える。

そこから、当初予定の道とは異なり、海沿いの道を進む。さすがに最北の地。周囲の植物もフシシユというのか、背の低いものばかり。小さな池が点在し、地形も小さくうねる。「ルン発祥の地と言われる」セントアンドリュウズ「もさぞやこんな地形では？」と、まだ見ぬスリットランドに想いを馳せたりなどする。

稚内の市内に入る。そして、いつものまにか市内中心街。稚内駅前を通ったらしいが、自分は気が付かない。〇〇子が「稚内駅は、日本最北の駅ではないの？」と言いつつ。「そうかな？」と、思いながらも「例え最北でも、連続した鉄路で最北に位置する駅だろう」と思っていたら、〇〇子はまた「地図で見ると、線路が行き止まりになっている」と言いつつ。ノシヤップ岬の帰りに寄ってみる事にした。

市外を抜けると、ノシヤップ岬。一〇時頃であった。結構寒い。あまり見るものも無く、来たという証拠に写真を一枚撮り、一〇分ほどで去ることにした。

稚内駅に寄る。やはり「最北の駅」の看板が出ていた。

* 自分は「最北」とか「最南」とか「最」の字が付くと興味をそそられる。図らずも「最北の駅」に來られたことを喜んだ。

〇〇子は例により、パンフレットをもらいに駅舎に入る。すぐに出てきて「スタンプが沢山あるので押してくる」と再度駅内に行く。自分は、入場券で構内に入れば鉄路の最終点が見えないかと、案内所で問えば「駅の横道を通れば構内に入らずとも見える」と教えてくれる。〇〇子は、その案内所の女性と話し込んでいた。〇〇子にも来るよう伝え、駅裏に廻る。確かに鉄路は最終点になっており、その旨伝える大きな案内板まで立っていた。二人で写真を撮ろうと、三脚を立てカメラの準備をする。待てど暮らせど〇〇子はなかなか来ない。やっとのこと来た〇〇子に「遅い」と言えば、先ほどの女性と話し込み「手紙を出す約束をした」と言いつつ。案内板には最南・鹿児島駅名も書いてあり「鹿児島から」まで続いているの「ネ」と〇〇子も感慨深々言いつつ。案内板を横にして「ニシヨシツ」。

* 右上に「何げなく目をやる」と「これは泊る気にならないのではなかつたか。」

稚内駅には三〇分以上居て、出発したのは一時間過ぎであった。

後は、まっすべに「宗谷岬」を目指す。ナビの目標地点手前に像が立っている。車を止め、歩いて逆戻りする。それは間宮林蔵の像であった。「間宮林蔵渡樺の地」の案内板もある。写真を撮り、車に帰る。

* ここには次のような歌碑もあった。戦前の日本住民を慰むものであろうが、何となく最北の地に相應しい印象を受けた。

噫宗谷海峡

東海林義男

暮色蒼然 掩樺太

幾万同胞 再不帰

茫洋咽頭 悲病情

一片残光 照海峡

そこから走ること一〇分程で「宗谷岬」に着いた！。着時間 一時四七分。神岡からの走行距離 一七二〇キロである。

二人とも防寒対策を充分して、カメラを持ち車を出る。例の「流水溶けて・・・ハマナス咲いて・・・宗谷の岬」の歌がスピーカーより流れている。早速缶ビールを求め、念願の地に着いたことを祝す。妙に心が弾み、はしゃぎたいような気分。まずは記念写真。「日本最北端の地」の塔の前には行列が出来ており、我々も並び。写真の後、〇〇子は二軒ある売店で高台にあるほうを見に行き、自分は残って彼方此方写真。その後広場にある売店に二人で入る。売店の前でも「2ショット」。売店では「日本最北端到着証明書」や絵葉書など買い求めた。

* 「証明書」には次の記載があった。

「本日あなたは北緯45度31分日本最北端の地、宗谷岬に到着し、その足跡を印したことを証明いたします。

〇〇〇. 〇〇5. 〇3 12.22 稚内観光協会

〇〇子は、ここでも友達宛に絵葉書を出すと言いつつ、自分にも書けと言いつつ。さて誰宛にと思えば、母さん以外に出す人を思いつかなかった。

* 母さん宛に

from Katsunori
to Matsuko
with my Love
at Soya Cape

と書いた。Cape の単語を思い出すのに、随分と時間がかかった。

* この葉書は、帰宅後、〇〇子が小樽で書いた葉書と同時についた。母さん曰く「お父さんの何も書いてない」。そんな事無いだろ」云々の。再度見直して「下のほうに、チョロッとあるわ」云々の「発見」。

車に帰り、一休み。「来た甲斐があった」と語り合う。「宗谷岬」を後にしたのは、一三時一〇分であった。

来た時とは反対に、オホーツク海沿いの道を通ることにした。このルートは、紋別市手前までは海沿いを走り、右折して陸中山中を走るというものである。

「宗谷岬」を出発して程なくのことと思うが、話が南極観測船「宗谷」のことになる。西堀栄三郎著「南極越冬記」の記憶を元に「第一次越冬隊」が苦労した話などとする。それは、私が小学六年生の時のことであり、話が急に「東先生」のことになったりする。

* 自分が無理してでも大学に行きたいと思ったきっかけは、「東先生」の影響が大きいこと。東先生が「矢上」を離れるにあたり、自分に机を残してくれたこと。その机は今でも「矢上」に置いてあり、同時にもらったテーブルクロスは、今なお自分の勉強？机の上で敷くことになっている。

* 話は飛躍して、〇〇子が「何故、机を持って移動しなかったの？」と問うので、九工大の寮は机が要らないシステムになっていたなと、学生時代に話が及んだりする。

「タロー・シローも、その時の話でしよう？」とさらに問いかけてくる。先の「越冬記」や、半年前位であったろうか、テレビ「知ってるつもり」に、第一次越冬隊員「北村氏」が出演し、タロー・シローの思い出話をしたなど、これまた一講釈。

* 「南極越冬記」では、北村氏は青年隊員で登場するが、テレビに出た同氏は白髪交じりの「・・・大教授」となっていた。当然と言えは当然だが、自分のイメージでは「青年・北村」が、突然白髪交じりが出てきたのにはビックリした。

南下するに従い、景色もブッシュから、木々の高さも段々と高くなり、緯度による気候の差を強く感じた。

* 登山など、高低差による植物の生態変化は、これまで何度か経験したことはあるが・・・。

昨日の沿岸沿い走行は夜間であったが、本日は昼間。海の景色を見ながら、例により「○○○」前後で走る。右折して陸中に入る。「北海道らしい景色」に随所で出会う。

「ハブニング」場所は何処であろう。すでに山中を走っているとき、○○子が「鹿だ!」と言う。左側牧草地らしいところで、眼前五〇〇程の所に一頭の鹿がいる。蝦夷鹿であろう。急いでカメラ。○○子も撮る。私が着けているレンズは「○○」、これで数枚。「○○」ではあまり大きく写らないので、「○○」にレンズを交換、狙った瞬間、鹿は逃げ始めた。しばらく車を進める。今度は右手に数頭いる。こちらは距離が遠く、一〜二枚の写真を撮ったのみ。

「ハブニング」急に雨が降り始めた。道路が雨に濡れる。と俄かに地面から霧が上昇し、前が見えないほどになった。これは、暖められた道路に雨が降り、雨が水蒸気となるわけだが、周囲の温度が低いため、霧になったと思はれる。理屈としては理解できるが、前が見えないほどの霧が上昇するというのは、初めての経験であった。

* 出発前、連休中の北海道は天候不順の予報が出ていた。しかし、「パラパラ」の雨は別にして本格的な雨に遭ったのは、この旅行に「おごっこの時のみであった」。

何時だったか、日にちは明確に覚えていないが、〇〇子に「お金は大丈夫？」と聞かれた。いざとなればカードでおろせばと思っていたので「大丈夫だよ」と答えると、それを見透かしたように、「連休中でカードは使えないよ」と言われる。「そうだ！」と思いそれから急に現金が気になり出した。

旭川市内に入る。これまでは魚料理や「自炊」ばかりであったので、旭川では「肉を食べよう」と決めていた。但し、先のお金のこともあり「野宿」優先で決めていた。ガイドブックに載っているジギスカン屋の前を通るがあまりパツとしない。しかも駐車(野宿)場所も含めて探すとなると、容易でなさそう。いつものルールで駅にて探すことにし、旭川駅に向かう。一七時三〇分駅着。

宿をとると決めたのは、駅前の駐車場に車を止めた時である。〇〇子に「ビジネスホテルでよいか」と聞くと「何でもかまわない」と答える。それに決め、〇〇子が交渉役。結果は、どこも混んでおり、「ツイン」も無く「ダブル」で頼んだと言う。

ホテルまでの道順を聞き、荷物を置いてすぐに食事に出た。焼肉屋を探しながら歩く。数軒覗くがあまりパツとした店が無い。諦めはじめた頃に、やっと小綺麗な店を見つけた。「豪華に行こう」ということにしていたので、先ず目に付いた「牛ロース 二五〇〇円を二人前」その他数種類を頼む。ビールを二人で飲み、食べる。〇〇子が、かいがいしく焼いてくれる。

* 〇〇子が三杯目のビールを頼むが、なかなか来ない。ウエートレスに『三杯目』のビールがまだ来ない」と言う。中々しっかりしてこないと思いつつ「タッパ、四杯目と付けられてはタマラナイ」との返事。ウエートレスも心得たもの「三杯目」を持ってきまして、と言いなから置いて行く。

夕しが少し濃すぎたのか、張り切って頼みすぎたのか、「欲で」最後は食べたが少し残った。

ホテルに帰る。湯に入り、〇〇子も入り寝ることにする。〇〇子は「かまわない」というが、さすがにそれは出来ず、自分はシーツを床に敷いて寒くないよう着込み、〇〇子をベットに寝かせた。寝たのは二三時過ぎ、本日の走行距離、四一三キロ。

【第六日目：五月四日】

ホテルを出たのは、七時三〇分。「倉之旅行」故、朝食は頼まず途中のコンビニにて牛乳・パンなど求め済みます。まず、美瑛町に向かう。美瑛町駅前はその方針なのであろう、洋風の建物が居並んでいた。

駅にての、パンフレット入手はいつもの通り。さて、どこを観るかということ。「北西の丘展望公園」「セブンスターの木」「マイルドセブンの丘」を候補に上げた。

「北西の丘展望公園」は美瑛町が一望できる。春が早いため植物の色をした畑は少ないが、なだらかな丘陵の中に大きな区画の畑が見える。まさに「北海道の農業」という感じ。

観光客も結構いるが、地元の人は農作業をしている。「農作業側」から「観光客側」を見る目感情はどんなものであろう、と考えたりする。

「セブンスターの木」「マイルドセブンの丘」は、それぞれ丘陵の中に、木が一本立っているだけ。何故これが観光スポットになるのかと訝るが、テレビの「マーシャルシーン」に登場したのだそうだ。これは〇〇子に教えてもらった話。

次の目標地、富良野に向かう。先ず駅を目指すのは、ルールどおり。富良野では「北の国から」の小屋を見るのが、第一目的。

* 一時「前田真三」の写真を撮っていた時期があったが、今はその気はない。前田真三のキャラクターもあるらしいが、奇を旨せず、見過ごすようにした。

「麓郷」は、富良野市街から車で三〇分ほど離れている。「森の丸太小屋」には一時三〇分に着いた。大勢の観光客がいる。これまで見たところでは、いちばん観光客が集中していた。テレビシーンの「丸太小屋」、「五郎」らが最初にたどり着いた「小屋」などが、残してある。「北の国から」のシーンを想いだしながら観て回った。「丸太小屋」はテレビでは炎上する。しかし、実際は「本物」をこの地に移設し別ものを燃した、と案内書きには記載してあった。「北の国から」のテーマソングがスピーカーより流れており、CDがあればと店に入るが、それは無かった。

次に、「五郎の石の家」に行く。「丸太小屋」からは車で二〇分の所。ここも人が多い。この「家」は、これからもテレビロケで使用する

ということまで、遠くから眺めるようルートが設定してある。行列について観るのみ。ここでもテーマソングが流れており、何気なく店に入ると、今度は「北の国から」のCDが在った。早速買い求める。自分もミィハーだと、内心苦笑した。

テレビ放送局員らしい人が、二人でテレビカメラを回していた。ゴールデンウィーク中の観光客をニュースとして流すのであろう。〇〇郎もこんな風に仕事をしているのかと、側で少し立ち止まり彼らの仕事振りを見る。「自分の息子も同じような仕事をしている」と、話し掛けようかとも思ったが、それは思い止まった。「北の国から」の後は、「ホプリの里」に寄る。ここは、ラベンダー畑が売り物の場所であるが、これまた時期が早く、入り口でその広さのみ確認して早々に引き上げた。時間 一二時二〇分。

あとは苫小牧を目指す最終走行のみ。ただ、途中で「最後の昼餐」を取るという目標は残っている。〇〇子にその話をする、余り気乗りがしない雰囲気。それなら、どこか食堂にでも入るかと思案しながら走ることにする。それでも〇〇子が、どこか良い場所があれば「最後の昼餐」をしても良いというので、両案「視野」に入れながら走る。空知川を右に左にし走行、「北の国から」のシーンを想い出す。

富良野市を抜けたころ、小さな道の駅があった。ここで食べようかという、〇〇子も同意。但し、疲れもあって大業なことは出来なかった。「最後の昼餐」用に札幌で求めておいた北海道産ワインの栓を抜き、チーズで乾杯、後はインスタントラーメン。

* 出発前描いた「パラソル付きの食事」は、結局出来なかった。夢と現実とは中々一致しない一例か……。

これまでの旅程は「無計画の計画」であるから、ある意味で時間に拘束されることは無かった。しかし、ここからのみは違う。苫小牧のフェリー時間までには、必ず着かねばならない。食事を終えんとすべく出発、一路苫小牧を目指す。出発時間一四時二〇分。

この旅で、一つ欠けているのが「アイヌ」に触れていないことである。旭川に資料館があったが、開館時間が一〇時で、出発との兼ね合いで観ることが出来なかった。地図で見ると苫小牧への道すがら、日高地方に「アイヌ文化資料館」の表示がある。時間があれば寄ることにした。そこに着いたのは、一五時半過ぎ。〇〇子が入ろうというので寄る。正式名称「平取町立・二風谷アイヌ文化資料館」、入って驚いた。人はまばらであるが、誠に充実した博物館。「アイヌ文化」を堪能した。資料の一つに、「アイヌ語の分布を示したものがあつた。北海道を中心に広く拡がっているが、まさか「ピョンヤン」、シベリアの「ヤクーツク」などもアイヌ語とは思わなかった。博物館を出て、アイヌ人の開く店に入った。記念として〇〇子に何かと思ったが、欲しいと思うものは数万円、残金を考えると買えなかった。

* もじ、〇〇子が「アイヌ人と結婚すると言いついたらどう返事するだろう。」とちょっと待って「E」と言いつつ。曰く、大きな事を言いつつながら、それ自分のことになるときえぬ。

いよいよ北海道最後の走行、再び海沿いの道に出て、苫小牧・周文埠頭に着いたのは一六時三〇分であった。

出航予定は、二〇時一五分。少し余裕がありすぎるが、さりとて外に出るほどの時間はない。この埠頭内で時間をつぶすことにした。先ずは、乗船手続き。〇〇子が率先して動く。後は車の中で一休み。〇〇子は駄菓子など食べ、自分は「北海道旅行の完成に乾杯」などと理屈を付け水割りなど。車の中で何か話したのであるが、あまり憶えていない。ただ「宗谷岬に行けて満足」という内容の話をしたようにも思う。

〇〇子は乗船準備など始めた。今度の乗船時間は長く、約二〇時間ある。「寝袋を持ち込む」「今度も、窓際の間所を取っておく」等といながら準備をすすめ、乗船タワーに向かった。合流法は携帯TEIにて、やり取りすることにした。このような場合、携帯TEIはなかなか便利。

一九時、車の上船開始。「動き始めた」と〇〇子より携帯TEIが入ったりなどする。車を止め、船室に上る。船室は大きく、意外と豪華。携帯TEIに誘導されて、〇〇子のいる場所に行く。〇〇子は言葉じおり窓際に席を取って手を振り合図。

* 予約時、「寝台」にしますか？と言われたが、「貧乏旅行」故「和室」とした。特別室は判らないが、普通なら「寝台」より「和室」の方がずっと良いのに気がついた。棚状の「寝台」より「和室」の方が自由度は、はるかに大きい。

定刻 二〇時一五分に船は離岸する。いよいよ、北海道ともお別れかと外を見る。外はすでに暗い。〇〇子も見ている、どんなことを想っているのか……。

食事に行く。カフェテリア方式の食堂で、惣菜風の料理もあり、おもい思いのものを取る。食材は決して高価でないが、この五日間食べた料理群と異なっているため、きわめて美味に感じた。〇〇子も同じ思いつく「美味い」といふ。

* 但し、翌日の朝食・昼食も同じメニューより選ぶことになり、食事を重ねるたびにその「美味印象」は落ちていった。

後はそれぞれ勝手に行動。船内を見学したり、風呂に入ったり、ゴロゴロしたり。いつのまにか寝ていた。

【第七日目：五月五日】

目を覚ますと、外はすでに明るい。船内に、走行距離を示すテレビ表示があり、見ると船は秋田沖を走っている。部屋に戻り、地図を出して船の概算速度を計算すると、約50キロ／時であった。〇〇子も起き二人で朝食。

船は一旦秋田港に寄る。この接岸・離岸の様子は二人で並んで見た。この時であったかと思うが、〇〇子が「写真は撮らないの?」「言う。」「シヨット」はいいのという意味。これまでの「シヨット」は大半自分から言い出したのだが、上船以来「シヨット」を撮っていない。〇〇子が気を利かして言ってくれたのである。しかし、「別れの写真は不要」という気もあったのだろう、あまり気乗りせず「いいや」と返事。

昼食以外は別行動。ラウンジでビデオ放映を観たり、テレビを見たり、甲板に出て海を見たりなど。〇〇子の行動中心は「昼寝」。よく寝れると思うが、これも若さの故か。寝袋にて横たわる姿は、まるでセイウチの昼寝姿にソックリ。

最も贅沢な旅行は「船旅」というが、果たしてそうかな、と思ったりなどする。豪華客船の設備は知らないが、まあ、豪華ホテルが動いているようなものであろう。一日中ホテル内、ただ外に海が見えるのみ。そう思うと、返屈な旅ではないかという気がした。

新潟には一五時三〇分着の予定。一四時過ぎからは、下船の準備を始めた。

定刻に新潟港に着いた。下船は上船時と異なり、二人とも車にて下船。

* 〇〇子は問にあえば、本日中に京都に帰りたいという。富山駅発が一九時五七分。何とか間にあうと自分は読んでいた。

車で外に出る。急いでナビを富山駅にセット。走り始めるが、苫小牧から新潟に船で来たのにナビが戸惑い「現在地」を探し出せない。自分の間ナビ上では「海上を走る」事になる。ようやくにして、ナビが正確な位置を示し始め、新潟ICを目指す。富山駅が確実になるまで、ひと時間あまの走りの「何とか目処がついた」と思った頃より渋滞し始めた。親不知の手前である。一〇キロ走るのに小一時間要した。再度頑張った(っ)走りのびるを海なら状況になる。この間何か話したのだろうか、あまの記憶がない。唯一憶えているのは、親不知で車は海上を走る。〇〇子はその話すと、外に目をやり「ホント」とビックリ。ようやく「目処がついた」とタイシ休憩をしたのは、流杉PMAで
あめ。

【エピソード】

こうして「二人旅」は完成した。〇〇子の成長ぶりも見た。北海道も見た。皆が言うように、二三才の娘との旅など珍しい話かもしれない。願わくば、これが最後の「二人旅」でない事を望むが、これは見果てぬ夢で終わるのかもしれない。

【あとがき】

三年半前、父の思い出を綴る文集を作成した。この時は、全て手書きであり、文明の利器としては「コピー機のみであった。

今度の「旅行記」を発行するにあたっては、全てパソコン対応で実行することにした。従来自分は仕事柄文書表現も全てEXCELにて実行していた。しかし、今度のような、縦書き長文の文書処理はWORDが良からうと初めてWORDに挑戦した。

「旅程図」を示す地図の処理も初めて「マップ」機能を使用した。マップを思い通りのイメージに仕上げるのに二三日要した。最も新たな試みは、写真の処理である。ネガフィルムより直接編集表示するため「スキャナー」を買い求めた。これの操作技術の習得にも、約一週間要した。これほど時間を要した理由の一つに、スキャナー付属のソフトでは処理できない部分があり、別のソフトを用意したりなど、かなり試行錯誤で技術マスターした経緯もある。

こんな理由で「本文作成」と「新技術マスター」とで、かなりのエネルギーと時間を要した。

読者諸氏に何らかの「思い」を伝えることが出来れば望外の喜びであるが、出来栄えについては読者諸氏のご批評を待ちたい。なお、本旅行記の発行部数は「限定四部」である。

陰ながら、この旅行の成功を願ってくれた〇〇郎に感謝する。

作成にあたり側面的な支援してくれた「母さん」に謝意を申し上げる。

本旅行記の登場人物・〇〇子にも感謝の意を表す。

平成二二年六月二五日

著者

